

学級ネットニュース

2010年9月

みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい

教育研究全国集会2010

全国の仲間が和歌山へ！

全国教研が、今年是和歌山で行われました。8月20日にフォーラムと開会全体会が、21日と22日は分科会が行われました。

はじめいは

「教育フォーラム」から

1日目はお昼から、6つの教育フォーラムが行われました。

障害児教育のフォーラムは、「特別ニーズのある子どもたちと、教育づくり・地域づくりーひろげて・つないで・つくりだすー」というテーマで開かれました。和歌山の障

害児学校の小畑さん・就学前施設の谷さん・お母さんの松下さん・生活支援センターの野中さんの4人がパネラーとして報告されました。

就学前施設を作って取り組みを進めながら、子どもも親御さんも育てられていること。障害児学校高等部を卒業しても、もっとゆっくり学びたいという思いから、専攻科運動を取り組まれてきたこと。社会福祉法人としても不登校やひきこもりの支援を行う中でわかってきた若者の願いや仕事の意味。どれも和歌山の障害児者運動や実践の豊かな歴史を感じ、インクルーシブな社会に通じる大事な視点を学びました。

小畑さんからは、職場の先生仲間といっしょに発達保障の観点に立った実践を作ってきたこと、そこには全国のすぐれた実践に出会う中でご自身に自己変革があったこともお話されました。





この後、会場からの教育づくり・地域づくりについての積極的な討論と、パネラーからの発言をうけて、コーディネーターの荒川智さんは、特別なニーズのある子どもたちが安心して育つインクルーシブな教育づくり・地域づくりをすすめていく上で、発達保障の根っこの一つである和歌山の取り組みから大いに学んでいこうとまとめられました。

「全体会」満員御礼！熱気溢れた一日目

夕方から始まった開会全体集会、会場の県民文化会館大ホールは満員になり、熱気に包まれました。オープニングは、「青い空・山・海に届け！心ひとつに魂ふるわす青春の鼓動！」。紀北農芸高校ときのかわ支援学校の和太鼓合同演奏でした。タイトル通り、力いっぱい演奏する青年のひたむきな姿に、感動しました。

この2校の和太鼓クラブの交流は、なんと！もう20年近くも続いているそうです。実践も以前に報告されており、青年期の自主的な活動にしてきた先生たちとそこで育っていく青年たちの、いろんなドラマが今日まで続いているようです。

記念講演は、作家の落合恵子さん。「いのちの感受性—あなたへのメッセージ」というテーマでした。たくさんの絵本を紹介されながら、人権・平和・いのちを守るために「やわらかくつながりましょう」と語られました。

「『生きている』っていうことは『捨てたもんじゃないよ』」、このことがじ〜んと心に響いた」など、参加者を感動の渦に導きました。

「障害児教育交流会」和教組の聖地？で。

和教組のみなさん行きつけという市内のお店で、たくさん飲んで食べてしゃべって、総勢40名を超えるみなさんで楽しいひとときを過ごしました。さすが和歌山の海、おいしい魚料理もいただきました。集まれば元気！しゃべれば元気！こうして、2日目の夜も過ぎていきました。

熱い討論！ 障害児教育分科会

2日目の午前中は、障害児教育分科会の全体会が行われました。



越野和之さんから基調報告で、「私たちは、障害の重い子どもたちを、教育の主人公として、そこにふさわしい教育の内容と方法、それを支える教育の制度や諸条件を整えるべく努力してきた歴史が、権利侵害の歴史を、その時間の長さにおいて乗り越える地点に立っている。次の30年間をどう見通すのか、それが問われている」と指摘され、「構造改革や学力テストなどの中で、小・中学校などにおいて『排除』が拡大しているのではないか。障がい者制度改革推進会議の動向にも注意が必要。私たちの『インクルーシブ教育』を打ち出そう」という提起がありました。



また、七生養護学校元校長の金崎さんより最高裁勝利判決のお礼と報告もありました。

その後、参加者からの各地の取り組みを交流しながら、本来のインクルーシブ教育について語り合いました。



2日目午後から3日目午前までは、6つの小分科会に分かれて、全国からのレポート報告を受けて討論しました。

子ども期（小学校）小分科会では、「発達障害の子どもへのねがいをつかむ」「障害児学級の実践と子どもの育ち」の2つの柱を立て、通常学級2本、障害児学級5本のレポートをもとに討論をすすめました。集団や文化を大切にしたい障害児学級の実践、発達障害の子どもも受け止めた通常学級での苦悩の日々、運動会を中心にした障害児学級での発達障害の子の成長、工夫した教材、学校全体で取り組んでいる子ども理解、通常学級と障害児学級の交流など、様々な内容の報告と討論がされました。





7本のレポートのうち、発達障害の子どもたちにかかわるレポートが5本も出されているという状況をうけて、障害児学級そのものの実践が弱まっているのではないかと指摘もなされました。

特別支援教育が始まり、「個別指導計画」等の押しつけが強まる中で、子どもを学校に合わせる傾向も生まれています。こうした状況を打破する

ためにも、「子どものねがいに丁寧に寄り添う」「その真のねがいにこたえる文化を手渡す」ことの大切さを確認するとともに、共感的自己肯定感は、子どもだけでなく教職員にとっても大切であること、「子どものねがいに寄り添い、その発達を豊かに実現する」ために、なかまの支えのある学校づくりをすすめることの大切さを確認しました。



その他、思春期小分科会では、中学校の障害児学級の実践や中学校の支援体制作りなども報告があり、論議されました。特別支援教育の論点と教育条件・学校づくりの小分科会では、全国から特別支援教育の現状や課題など、報告されました。



3日目の午後は、今年度初めて障害児教育の全体会を持ちました。小分科会で深まったことなどが出し合わせ、すべての子どもたちを受け止める、私たちの「インクルーシブ教育」のイメージを深化させ共有する時間になりました。

全国の仲間と出見え、実践を学び、また明日から子どもたちと向き合おう！という思いを改めて感じ、教育のつどい和歌山集会は、三日間の幕を閉じました。

準備から当日まで、全体会や分科会を支えていただいた、和歌山のみなさん近畿のみなさん、ありがとうございました。

**今度は1月8日～10日
障害児学級学校学習交流集会in宮城で
お会いしましょう！**